

味爽抄

手帳の中から

藤井乙男

大阪の書籍商組合事務所には享保頃から維新前に至る出版届を保存して居る。江戸も京都も皆焼失してしまつた今日では、出版史上貴重な資料といはねばならぬ。先年一見した際、手帳に記めて置いたものゝ中から、少し話して見よう。

私の興味をもつ上田秋成のものから始める。

覺

一世間姜形氣 全四冊

堂島永來町

嶋や仙次郎

作者

和譯 太郎

右之書行司立合相致候所何方にも差構無之書に御座候
間板行被爲仰付被了候様に御願上可被下候 以上

明和四年

木や行司

亥正月

安堂寺町五丁目

木屋 伊兵衛

高麗橋一丁目

富士屋 長兵衛

車 町

開板人 正木や清兵衛

御三人へ

諸道聽耳世間猿

全部五冊

堂嶋永來町

作者

損 徳 叟

右之書行司立合相致候處何方にも差構無之書に御座候

間板行被爲仰付被下候様御願上可被下候 以上

明和元年十一月

木屋行司

木挽町中之町

吉文字屋市兵衛

順慶町五丁目

編者

上田 無腸

升屋 大藏

安永六四年二月

古今和歌集打聽 全部七冊

開板人 正本屋清兵衛

淡路町切町

伊勢村新右衛門殿

校考者

上田 秋成

野里屋四郎左衛門殿

薩摩屋仁兵衛殿

書式は右の如く本屋行司が検閲の上連署して年寄三人へ願ひ出るのである。戯作類のものは筆名でよかつたものも見えて、和譯太郎や損徳更なご署してゐるが、面白いこゝは和譯太郎の肩に點をかけて、嶋や仙次郎も傍書した點である。是によつて秋成の養子にいつた堂嶋の上田さいふ家は永來町にあつて家號を嶋屋さいひ、秋成も若旦那時代には仙次郎と呼ばれた事が判る。秋成は國學の方での名、餘齋は醫者としての名であらう。

なほ秋成のものは此他に

俳諧梅翁發句むかし口

全部壹冊

作者

伊丹屋善兵衛

島町堂丁目

今古 奇談唐のよし野 全部五冊

秋成の轉居癖は有名で、自ら鶉居と號した位であるが、大阪市中でも既に尼崎町、淡路町とかはつて居る。刊本の「むかし口」には編者の署名なく、後刷本は「宗因句集」に改題し、一炊菴や月居の序なきつてあるので、往々一炊庵の編輯のやうに考へる人もあつた。私はその巻首に掲げた宗因傳の文章がさうしても普通の俳諧師の筆らしくなく、また版下が秋成の手に酷似してゐるので、久しく疑をもつてゐるが、是に由つて自分の推測の中した確證を得て愉快に感じたのである。

上方の讀本作者伊丹椿園の住所に通稱がわかつた。椿園はこの他に今古奇談に角書した翁草、唐錦、深山草の作がある。

最後に近松の文藝觀を見るべき唯一の資料として重寶がられる難波みやげの扇書を擧げて一疑問を提出する。

一 淨瑠璃評註 全部三册

難波みやげ

作者 備前岡山 三木平 右衛門
開板人 永田や吉右衛門

右之書物行司立合相致候所何方へも差構無之書に而御座候間板行被仰付被下候様御願上可被下候 以上

元文二年巳五月

難波みやげは近松半二の父穂積以貫の著としてこれまで通つて居たものである。然るにこゝには作者備前岡山三木平右衛門とある。以貫は儒者であるから淨瑠璃の評註に名を署するを憚つて他人の名を借りたのであらうか。しかし以貫に決定すべき理由も薄弱なやうである。卷首の近松の肖像に贊をしてゐるからして、その人が必

ずしも此書の著者であるとはいはれまい。序文を書いた西海の蘭臯とはいかなる人か、これも不明である。以貫に近松は交際があつたであらうが、近松にも交友は多からうから、それのみで以貫の作に決定するも稍々輕卒のやうに思はれる。さればこゝ岡山の三木某なる者も一向素性がわからぬから、今のところこの文書のみで、それが眞の著者であるとも、單にロボットたるに過ぎないとも判定は下しがたい。こゝにかく疑問として解決される時期の來るを待たう。